

六花



俳句雑誌 りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

4

金 継 や 男 た ら し の 春 火 鉢
下 手 に な る 俳 句 う れ し や む め 句 ひ
黄 身 が か る 梅 満 月 に の ぼ せ け り
梅 咲 い て 茶 漬 の 如 き 月 の 丘
羊 羹 の 闇 し ん な り と 梅 白 し
十 六 夜 う て く も り を す こ し 梅 の 月
鉄 を 切 る 句 ひ の 中 の 彼 岸 か な
つ ま づ き 石 に 彼 岸 ま い り を す ま し け り
ひ め 石 に 彼 岸 ぼ た も ち 置 い て く る
腕 枕 し て ゐ る 彼 岸 あ ら し か な
一 握 の 砂 よ り 出 で し 浅 蜷 か な
千 里 ^ち ^は 浜 ^ま に 流 れ つ き た る 黄 水 仙

初蝶来言葉がつばさ得しごとく
水鏡雪吊縄の温みけり
犀川の雪解千鳥を見にゆかな
花辛夷の色とんでくる山の声
鶉にひもじき春の空ばかり
立春大吉松の鱗の亀甲に
耕しの大きな岩をめぐりけり
耕しやつち色に土をどり出て
つま先を谷底へ向け耕せる
梅だより真直ぐに押さば印ゆがみ
春雨の玉かざりして猫もどる
追ひかくるつもりなけれど発つ雲雀

逃げなくてもいいのに雲雀飛び立つよ
てるてる坊主ひばりの声に濡れてをり
揚り鳴け落ち鳴けひばり日和かな
落下傘よりは早しよ落雲雀
ひばりなく方へ傾く休み歟
春の雨傘さす男にはならじ
やめなさい鮎子にちよつかいだすのは
水ぬるむ石段に腰おろさうか
春の水見てゐてまなこ泳ぎくる
残り鴨あひるの尻を離れざる
鮎汲みや昼餉ぬいてもかまへんわ
無精髭春日の中に痒かりき
口あけておどろく雛を納めけり

雪 卿 集

妻

貝 森 光 洋

雛壇に飛ぶのを堪^{こら}え紙の雛
何もかもみちのくぶりの凍豆腐
餓鬼大将背にあっぱれ春の泥
寒すばる妻には妻の生きる道
ときおりは小魚の影水温む

足

梶 浦 玲 子

月の息ことばあたため冬木の芽
投げ出した足のこひしき隙間風
津々の師走浮島横たはり
光陰の音は通さず白障子
木枯の取り乱したる平均台

雪 卿 集

猫 柳
笹村 政子

隧道の天井あかり冬の蠅
歪なく箒目凍ててをりにけり
火桶抱く坊守の皆動かざる
開きつつ色の失せゆく寒桜
掌に包めばぬくし猫柳

初 日
佐津のぼる

初日待つ明るむ沖に目を凝らし
暁天にしばらく残り去年の星
嬰の齒に匙当る音今朝の春
初みくじ読みつつ愁眉ひらきけり
初風呂やみるかげもなき力瘤

炭俵燃えて倒れて登校す

田尻 勝子

シイインと車近づく寒の入り

青空のなほ青々とこぶしかな

炭俵燃えて倒れて登校す

引越は西の方角冬ぬくし

薄氷斜に掬れて鳥の水

すみだわらもえてたおれて登校す たじりかつこ

火の筒が勢いよく上がって、火の粉を散らして倒れる光景が鮮やか。毎朝焚き火のころへ皆が集まって登校する。皆が揃い、出発まぢかになると炭俵を燃やす。ゴーと音を立てる火筒の温もりに勢いをつける。「さあ出発!」とリーダーの声。炭俵は石田波郷の句「薄雪や簷（のき）にあまりに炭俵」のような俵を使つて燃やす。昔は空の炭俵が沢山あった。俵は萱、蘆などを使つて編む。縦に硬く、横に弱いので立てて燃やせば勢いよく短時間で燃え尽き、横に寝かせて燃やせば火持ちがよい。掲句の場合には出発の勢いづけに立てて燃やしたのである。昔の子ども達は物の燃え方を熟知していた。親たちも火の扱い方を知っている子どもたちに任せているところがあった。

折れ口を合なせみてをり蓮根掘 住田千代子

おれぐちをあわせみておりはすねほり すみだちよこ

蓮根掘踏んばる足の沈みけり

折れ口を合はせみてをり蓮根掘

筆初め絵馬に走らす文字太き

買初は子の安産の守り札

鶴の舞ふ油単を解くが琴初め

蓮根を掘り出す途中で折ってしまった。折れた蓮根を残念そうに合わせてみる。覆水盆に返らずで、もういくら合わせて見ても元には戻らない、と解っているけれどそうしない。折れると商品価値がなくなる。そればかりか商品価値よりも植え付けから大切に育ててきた蓮根を掘り出すときに折れてしまった悔いの方が大きいのである。その気持ちが折れ口を合わせる行為ににじみ出ている。こういう場面を経験した人も多いだろう。そう、大切な物を割ったり折ったりしたとき。割れ口や折れ口を合わせたところ、元には戻らないと分かっているのに……。そういう場面を経験したはず。蓮根に物を言わせた俳句の見本。

せつ　じゅ　しゅう
雪　樹　集

升田ヤエ子

天袋閉まる間の無し年用意
冬蝶の紛れてゐたる神籤の木
喰積に焼きにぎり飯添へにけり
二日とろろ婆の大渦子の小渦
味噌桶の箍外れたる寒さかな

筒井八重子

薄氷斜に掬ふ鳥の水
春隣鉢の水仙日々目立ち
晴天や洗濯物を庭中に
日脚伸ぶ寒の入り日も大切に
鬼の面しばらく部屋にとどめ置き

蛍雪譚

六甲選

二十六年三月号選後に

何もかもみちのくぶりの凍豆腐

貝森 光洋

凍豆腐は関西圏という高野豆腐。江戸時代には最も流通した物がその販売地、販売者の地名を冠することがあり、これもその一つである。食べ物ではないが江戸時代の高級和紙を「すいはら（杉原）」というのその一つ。兵庫県のはぼ中央に位置する多可町加美区の北部、杉原で漉かれた和紙を杉原紙と言っていたが、芭蕉の書簡には「すいはら」と出てくるほど浸透していたのも、産地を冠していたからだ。鳴門巻も。

さて高野豆腐の名称は全国に広まっているが、甲信越地方・東北地方・北海道では凍み豆腐・凍り豆腐と呼ばれている。甲信越・東北・北海道で作られる伝統的な製法の凍り豆腐は、藁で数個ずつ豆腐を連ねて軒先に吊るして作るので、その形から連豆腐とも呼ばれているという。大阪では「ちはや豆腐」という呼び名もある。古くは氷豆腐と表記されることもあった。なお東北地方では製造途中の凍ったものを凍り豆腐として区別して冷凍販売し、乾物の状態のものを凍み豆腐として区

別して販売されているため、注意が必要。と『百科事典』に。この句は凍豆腐がいかにも「みちのくぶり」であるよ、と味わっている。見た目にも。この句の眼目は「みちのくぶり」にあることは間違いない。そのことを佳いなあと思っているのか、卑下しているのかは読者の鑑賞に任せてあるが「雑炊もみちのくぶりにあはれなり 山口青邨」と感じる食品なのだろう。青邨の句は「雑炊」で凍豆腐とは違うが、凍豆腐は「シミ」という語音も影響して哀れと言外に匂わせているのかも知れぬ。この食物は「保存食で色が地味、味が淡泊で美味でない。」など厳しい自然を生き抜くための食品で、味を楽しむ余裕の食品ではないなどのハンディを背負わされた歴史も見逃せない。自ら凍豆腐と同じみちのくに住む身を哀れんでも考えられるが、しかし「これこそ故里みちのくの味だ」という自慢も隠し味として。



六花集

脱ぎ捨てしまった脱ぎ捨てむ去年今年
 水鳥の内啼きた交し飛び初景色
 松のやボタ広がつけす糸もつれて
 縫初の本ほどんよき厚み初電車
 文庫のよき厚み初電車
 蓮根掘踏んばる足の沈みけり
 折れ口を合はせみてをり蓮根掘
 筆初め絵馬に走らす文子太き
 買初め絵馬に走らす文子太き
 鶴の舞は油単を解くが守り初め
 吾に賜ふ咲花選集池田喜代持
 晩学の今も咲花選集池田喜代持
 塵のし立つ鳴る学びふくさ
 寒耕の水鳴るろと照の喉
 冬耕の土黒ぐるろと照の喉
 太鼓打ちつ大石神社の屠蘇祝
 恥じらいを隠しきれざる春着の娘
 初掃除の沖の霜なまきり初電
 早口の除の沖の霜なまきり初電
 初手前の障子にひびくり茶筌かな